
一学生の憂鬱

咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一学生の憂鬱

【Nコード】

N4302R

【作者名】

咲

【あらすじ】

家出した兄の代わりに王立魔術学園に入学させられた斐名の目指せ平穏な日々！な学園生活。

目指せ平穩

——なぜ、私はここにいるのだろうか：

何度繰り返したか分からない、疑問を心の中で自分に問う。

ここは王都にある、王立魔術学園。

その入学式の最中、^{さなか}ただ疑問を繰り返す。

本来ならば、ここにいるはずだったのは双子の兄である流斐^{るい}。妹の
斐名^{ひな}ではなかったはずなのだ。

斐名は一ヶ月前のことを思い出していた。

「——魔術学園？」

声を揃えて、疑問を口にした双子に父は重々しく肯いた。

「どうして、俺がそこに通わなくちゃいけないわけ？」

流斐が不満を口にする。

まあ、その疑問はもつともだろう。なぜ、強制的に通わなくては
いけないのだろう。しかも、流斐だけ。

斐名も分からず、首をかしげた。

まあ、聞きなさいと父は話を続けた。

話を分かりやすくまとめると、

この国の建国に貢献した4人の若者がいた。

彼らはその後しばらく、国に仕えたが、やがて国中に散らばった。

ただその際、王が仕えるに値するならば、一族の一人を差し出そう
――。

そう、言い残したらしい。

その後、時代は移り、王太子が十五歳になると王立魔術学園に入学
することが通例となると、四族も同じように、一族の若者を入学さ
せ、王太子に仕えるか否かを見定めるようになった。

そして、今の王太子が今年、入学するのだそうだ。

「――それで？」

流斐が嫌そうに続きを促す。

「まあ、その四族のひとつがうちなんだよね」

父は悪びれもなく、そんな事を口にする。

「まあ、約束事だ。行っておいで」

その笑みは有無を言わせなかった。

――だが、あの流斐がすんなり、聞くはずがなかったのだ。

次の日の朝。

なかなか起きてこない流斐を不思議に思い、部屋のドアを開け、中の様子に呆然とした。

「……………と、父さまー!!」

部屋の中はもぬけの殻だった。

ただ、ベットの上に書置きが一つ。

——しばらく、旅に出る。

そう、紙に書いてあった。

その紙を拾い上げ、父は一言。

「しょうがない。王都行きは斐名、お前だな」

そう、のたまった。

「ええ!？」

「まあ、一族の若者が行けばいいわけだし、残念ながらうちの一族で王太子と年が近いのは流斐と斐名だけなんだ。——行きなさい」

その後、訳も分からないうちに、試験を受け、今日の入学式に至った。

入学式は何事もなく進んでいく。

斐名は溜息を付きながら、壇上を眺める。今は学園長の話らしい。

——唯一の救いは王太子側は四族が誰か分からないってことかな。

しかも、四族同士も互いがそうだと分らないらしい。

四族の名は秘匿とされている。四族すべての名を知るためにはその四族に仕えるに値すると認められなくてはならない。

だからこそ学園では偽名で通す。

ちなみに斐名は嘉月斐と名乗っている。

——入ってしまったものはしょうがない：卒業まで大人しくしよう。

見定める気はまったくない。

実際、我が一族は仕えたことは一度もないようだ。

今の王のときは父が来た。

やはり、父もめんどくさいという理由から見定めなかったらしい。

——その気はないのに約束は果たすとはどういう訳なのだろう？

斐名がこんな目にあっているのは流斐のせい。

——帰ってきたら覚えてなさい：

思惟に耽っていると、長かった入学式は終わったようだった。斐名も席を立ち、人の流れに乗り、会場を後にした。

——願わくば、平穏な日常を。とりあえず、王太子には近づかない。

目指せ平穩（後書き）

思いつきでできちゃった作品です。のんびり更新になるかなあと思います。

お約束？

ラゼア王立魔術学園。

ラゼア王国、唯一つの魔術師養成機関でもある学園は王族の学びの場でもある。

そのため、学園に入学したい人間は多く、倍率は恐ろしく高い。

正直言うと、入試で落ちればいいと思っていた。ちょっと手抜きすれば、受からないだろうと。そう、思っていたのに。

あの父が許さなかった。

どう許さないかは、言葉にするのも悍ましいので割愛する。
まあ、父への認識を改めました。

そういうわけで死ぬ気で勉強する羽目になり、その甲斐あってか、無事合格しちゃいました。

ほんと、恨みます。流斐のバカ。アホ。人でなし。

前記した通り、この学園は国唯一つの魔術師養成機関である。

魔術師は世界共通の魔術師協会が定める資格のようなもの。魔術師と名乗るには協会の試験に合格する必要があるわけです。

魔術自体は練習しだいで誰でも扱える。普段の日常生活でも簡単な魔術は使われているし、魔術が籠もった魔石を使用した器具などもある。

しかし、協会に所属したり、国に仕えるには『魔術師』でなければならないことになっている。

どうして、そうなったのかは過去の出来事に起因している。

魔術の乱用。

それは国を乱し、世界を混乱させた。

何百年と続いた戦争終結後、世界は魔術を規制した。その結果が魔術師協会の設立。

協会は『魔術師』という資格を設け、魔術師を管理し、魔術には初級、中級、上級と段階を作り、魔術師以外が中級、上級魔術を使用するときには事前に許可を必要とすることなど様々な制限が出来た。

『魔術師』になるためには2つの道がある。

一つは、世界に点在する、魔術学園に通うこと。

もう一つは、『魔術師』に師事すること。

どうして、この2つの道しかないかというと、試験を受けるためには『魔術師』の推薦状が必要なため。

言ってしまうと、『魔術師』は世界資格。

その養成学校でもある魔術学園はとっても志願者が多い。さらにラゼア王国においては王族の学びの場であるから、人気に拍車をかけているのだった。

さて。

このラゼア王立魔術学園の教育方法は教室制度というもの。

教師一人に数人から十数人ぐらいの生徒が師事する制度である。どの教師に師事するかは学園が適当に割り振っているらしい。

入学式の後、各々に指定された教室に向かう。

斐名が師事するのは『許宮莓』もとみや まい先生。どんな先生なのかは会ってみ

ないと分らない。

とりあえず、教室に向うことにする。

教室に入ると、斐名が一番乗りのようで、誰もいなかった。教室は二十人ぐらいが入れる階段教室で、一番後ろの席に座る。しばらくすると、紅茶色の髪をした女の子が入ってきた。

女の子は斐名を見つけると、笑顔で声をかけてきた。

「はじめまして、佐崎綾ささきあやりんです。よろしくね」

「はじめまして。嘉月斐です。こちらこそよろしくお願いします」

「同じ新入生同士なんだし、普通に喋って？綾って呼んでね。わたしも斐って呼んでいいかな」

綾は人懐っこい性格のようで、斐名の横の席に座り、しばらく二人で話していた。

話しているうちに、教室にはさらに2人の新入生が集まっていた。魔術学園は4年制なので、この教室の新入生はこれで全員かなと思っていたら、教室の扉が開いた。

扉に視線を向けると、金色が目に入った。

隣の綾が何か言っているが、呆然とした斐名の耳には入ってこない。

金色の髪をした少年と、青銀色の髪をした少年が教室に入ってきた。

金色の髪。

それはラゼア王室の証。

———まじですか？

もしかしくなくても。王太子、その人でした。

お約束？（後書き）

お約束ですよ。

トリップしてきました。

「――斐？」

「―――っはい!？」

綾の呼びかけに異次元^{どっか}に旅立っていた意識が現実に戻る。

「あれ？」

教室を見渡すと、残っているのは斐名と綾の二人だけだった。

「―――いつの間に？」

ショックの余り、思考が飛んでいたらしい。

「――先生も来て、話していたはずなのにどんだけ？」

長い間、トリップしていたらしいことに思い至り、自分の情けなさに脱力する。

「どうしたの？」

綾が机にへばりついた斐名の肩を揺さぶる。

「私にもなにがなんだか…目を開けたまま寝てた？」

「――まさかの王子さま発見で、。」

「なにそれ？」

「——そういうことにしておいて…」

「まあ、いいけど。とりあえず、帰りましょうか？」

「——そうする…」

――

自宅通いの綾とは途中で別れ、斐名は寮の自室へと帰った。

自室のベットに倒れこむように寝転ぶと、下校時に綾から聞いたことを思い返した。

正確には、意識が飛んでいた時の状況を。

あの後、許宮センセイが教室に入ってきて、簡単な挨拶があったらしい。どうやら、許宮センセイが生徒を受け持つようになったのは去年からで、教室の生徒の合計は二年生を入れても9人のみ。そのため、二年生を含めた顔合わせを次回行うことになったようだ。

「まさか、王太子と同じ教室になるなんて…」

ついてない。悪運にもほどがあると思う。

けれども。

私の平穩のためにも――

私が四族であることは隠し切らなくちゃいけない。

トリップしました。**(後書き)**

短いです。

登校拒否したい

——朝になってしまった。

前日の『恐怖』からか、なかなか寝付けなかったうえに夢見も悪い。どう悪かったかは思い出したくもない。というより、忘れ去りたい。もう、察してくださいとしか云いようがないぐらいに悪かった。

重過ぎるため息をベッドの中で吐き出す。

時間が迫って来たので、ベッドから這い出るように降り、身支度を始めた。

——朝日が目に沁みる。

気だるい身体を動かして身支度を整え、朝食を食べ、いざ登校という時間。

気分は最悪。

何故か。

入学して今日で2日目。

すでに心は登校拒否したい気持ちでいっぱいだから。

行かなくちゃ行けないのは分かってますとも。けど心は正直なんです。

——ああああああ、行きたくない……

陰鬱な空気を醸^{かも}し出しつつ、寮を出た。

――
教室の扉の前。

――いやいやながらの登校だったけど、着いちゃったよ。

さてさて、かれこれ十分ほど扉の前を塞いじゃってます。邪魔ですよ。でも、通行の邪魔だろうとなんだだろうと心は正直なんですよ。

開けたくない。

時間はもうじき予鈴がる時間。確実に何人かは教室内にいるようだった。

その何人かの中に王太子がいたら：

そう思うと、扉を開けるのを躊躇ちゅうちゅうしてしまう。
しかし、いまのままでは不審者だ。

――王太子に近寄らない。関わらない。そう決めたはずなのにな：

このままでは平穏な学園生活が遠のいていく。それとも、すでに手遅れなのか。

もはやデフォルトになりつつあるため息をつく。

いや、まだ大丈夫だと信じたい。できる限り、関わらないようにして…

「入らないの？」

心の中で一人、問答をしていると背後から声をかけられる。振り向き、後ろにいた人に心は凍りつきました。顔が引きつってないコトを求む！！

お約束なことに、さらさら金髪な王太子サマではないですか！

彼は不思議なイキモノを見るような目で私を眺めていた。ちよっと前までの自分を思い出す。

——うん。不審者ですよ。

とりあえず、なんでもいいから声を出すんだ私…！

「——えっと…お、おはようございます？」

ああ、もっと良い言い逃れはなかったのか…
言いながらも、すでに後悔していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4302r/>

一学生の憂鬱

2011年5月23日12時02分発行